



**たけもと・よしあき** ●1949年北海道生まれ。1972年武蔵野音楽大学を卒業と同時に名古屋フィルハーモニー交響楽団入団。1989年同楽団を退団し、名古屋芸術大学常勤講師。1994年英国王立音楽大学に1年間研究留学(古楽器修得)。1999年名古屋芸術大学教授。同大学音楽学部長、副学長等を経て2010年より現職。専門分野はトランペット演奏研究。



荒波に挑むトップ  
**私の改革論**  
No.32  
名古屋芸術大学・学長  
**竹本義明**

取材・文/仲谷宏 撮影/清水光市

# ボーダーレスをキーワードに 学生と芸術の可能性を広げる

## 学生が「感性」を生かして社会で活躍する場を広げる教育改革を推進

### 学生の意識の変化に合わせて学部を再編

芸術系大学は今、大きな転機を迎えています。かつての志望者は「日本画を描きたい」「バイオリンの演奏者になりたい」など、ジャンルや楽器を絞り込んで将来の目標を立てていました。そのため大

学は、音楽なら楽器別に、美術なら技法別に学科やコースを設けて、彼らのニーズに応える教育を提供してきました。

ところが、社会の変化とともに学生の意識は変わってきました。「ピアノもやりたいけれど他の楽器にも挑戦したい」「絵画に興味があるが音楽にも接したい」と

いった声があることからわかるように、芸術に関して幅広い興味・関心を持つ学生が増えてきているのです。それは、細かく区分されてきた従来のカテゴリーから脱し、境界を超えて新しい芸術を創造しようという胎動なのかもしれません。

また、芸術学部芸術学科に新たに加えた芸術教養領域では、社会のどのような場面においても活躍

できる学生を育成するため、ビジュアル、サウンド、英語、日本語情報の5つのリテラシーを幅広く身に付ける学びを提供しています。

音楽領域にも音楽総合コースを設置し、専門コースでの学びに加えて、自分でカリキュラムを選び、自分だけの音楽スタイルを見つける学びを可能にしました。

### 多様な進路に対応したプロジェクトを始動

2019年度からは、ボーダーレスな学びをさらに進化させるプロジェクト「Worlda(ワールドアイデア)」を始動させました。これは、WorldとIdeaを組み合わせた造語で、本学の新しい教育指針を示すものです。

芸術を学ぶことを通して磨いた感性は、芸術の中においてだけ発揮されるものではありません。現に、本学で学んだ学生はその感性を生かして、社会のさまざまな分野で活躍しています。芸大生の進路は演奏家や作家に限定したものではありませんのです。にもかかわらず、芸術家以外の道に進んだ学生の多くは、社会に出てからその道に必要なことを学んでいるのが現状です。それならば在学中に、ほかの

道で必要とされることも学べれば、学生の進路はさらに広がるのではないかと。このような考えの下、学生の進路のボーダーレス化に対応する取り組みとしてスタートしたのが、ワールドアイデアなのです。

ワールドアイデアは、「アート/エデュケーション」「グローバル」「キャリア」の3つの部分で構成されています。それぞれに、オナーズプログラムと全体向けのプログラムを用意しており、学生は自分の能力や希望進路に合わせて能力開発に取り組むことができます。

「アート/エデュケーション」では、音楽・芸術・教育分野で活躍する場を広げるために表現力を磨きます。有名アーティストを講師として招聘し、マンツーマンレッスンや公開講座を設けるなどを予定しています。

「グローバル」では、世界・異文化に自分を伝えるための語学力を磨きます。英語でプレゼンやディスカッションする力を身に付ける特別講座を開講するほかに、ネイティブ講師と気軽に英会話を楽しめる英会話ラウンジの設置などを行っています。

「キャリア」では、一般企業への就職を考えている学生への支援を、さらに充実させます。地域連携講座の開講や、ポートフォリオ

を活用した学修・活動履歴の蓄積と振り返りの促進などを計画しています。これらの取り組みを通して、学生の思考力を高める考えです。

### 現状を見つめ直し改善につなげる

本学ではワールドアイデアをはじめとした教育改革の成果を評価するため、学修成果の可視化に努めており、そのために必要となるアセスメントの導入や評価指標の設定などにも取り組んでいます。

芸術の評価は「感性」によるものが大きいため、数値化が難しいのは事実です。しかし、現状を評価しない限り、改善して次のステップへと進むことはできません。

数値化できる部分と、言語化で対応する部分とを組み合わせたハイブリッドな形で学修成果を可視化し、PDCAサイクルによって改革を進めていくことが重要なのです。

教職員は先が見えない状態では動きません。そのため学長の務めは、方向性を示し、丁寧に説明したうえで、組織の取り組みを前に進めることだと考えています。その点では、組織運営においても成果を可視化することは大切だと言えるでしょう。

本学は2020年に創立50周年を迎えます。今後もさまざまな角度から成果検証を行い、知性と感性のバランスのとれた教育を実現し、地域の芸術系大学としてのプレゼンスを高めていきます。

